

第3話

ロマンチック・サイエンス(2)
ニューヨークの路上で

●前号で発達障害を患う人の内面を私たちは知らない、と書いた。「彼なりに秩序ある心豊かな世界を生きる」とは、現実と隔絶した心象世界に、彼なりの手段で知りえた現実世界を再現し、そこで社会的役割の一端を担い、自分を模倣的社会に位置付けることでアイデンティティを保つ、という意味である。もし模倣で自分を持っていないなら、彼は底知れない闇に支配され、自分を見失い、場合によっては反社会的行為に走ることもある。ところで、サックスはアイデンティティを失うほど模倣にとり憑かれた障害者について語っている。

●ある日、O・サックスはニューヨークの路上で奇妙なざわめきに出会った。

彼の前を、60代と思しき一人の白髪の女性が歩いていた、というより何やら混乱のさ中にあった。歩くというより、動作が奇妙にぎこちなく、周りの人がその動作に合わせ、それがまた他の人にも伝染するといった具合で、辺り一帯にざわめきを呼び起こしていた。発作なのか、痙攣なのか、人とすれ違うたびにチックを起し、歯ぎしりをする顔つきになると、すれ違う相手も様子が一変した。サックスが近づ

いて分かったことは、『彼女は、通りかかる人たちのまねをしていたのだ。』(『』内は原文のまま引用した。以下、同。)しかも、それはまねなどと言ってすむものではなく、ほんの一瞬で通りかかる人の癖の全てをとらえていた。『これまで私は、数え切れないほどのパントマイムや物まね、ピエロや道化を見てきたが、そのとき見たすさまじい光景に匹敵するものはなかった。』彼女は一区画ほどの間に、すれ違う四、五十人の通行人のまねを瞬時にやり、あらゆる顔や姿を模倣しようとした。まねをされた人たちは、腹を立て、睨み返す。すると彼女はそれをも歪めてまねする。そこで彼らはますます激怒する、という共鳴現象がどんどん広がり、皆がその中に引き込まれた。それが、サックスが遠くから気づいたざわめきの正体だった。

●私はこのくだりを読みながら、ある本の遠い記憶が頭をよぎった。確かそれは、大学時代に愛読した『マルテの手記』の中だったはずだ、とそう思った矢先、偶然にもサックスも又、そのくだりで『マルテの手記』に言及した。パリの路上で、リルケが出会ったチック症の男は、歩きながら跳躍の発作を起していたが、やがて『その跳躍は彼の体内をうろつきまわって、あちらこちらで爆発しようとしているのだと、ぼくは理解した。』(『マルテの手記』

より)

●彼女の病名は‘スーパー・トゥレット症’と呼ばれる全人格に係る病だった。

それは、他人のアイデンティティにまで模倣が及ぶ病だった。模倣した他人の顔や人格が体内に渦巻き、当人の自我は攻撃にさらされた。その攻撃に『耐え切れなくなった彼女は、わき道へ入って行き、憔悴しきった姿で吐きだした。彼女がまねた四、五十人のしぐさや、姿勢、表情、態度、つまり彼女のレパートリーの全てを吐き出した。』大きなパントマイムのような動きをひとふるいし、取りこんだ五十人のアイデンティティすべてを吐き出した。さて、サックスが出会った女性は、『誰もの‘まね’をした。その代わり、‘自分自身をなくした’。だから結局、誰にもなれなかったのだ。』とサックスは語る。これは極端な例ではあるが、私には一種の‘共感の暴走’のように思えるのである。‘人間’とは何だろうか。

(参考引用文献)

- 1)「妻を帽子とましがえた男」(オリバー・サックス著 晶文社 1992年)
- 2)「マルテの手記」(リルケ著 講談社 1971年)



●編集後記

沢山の方のご協力を得て今月で通巻100号となったNTSニュースですが、創刊時(1998年)は社内報でした。バブルがはじけ多くの企業で経費削減のもと社内報を中止にするなか、NTSでは社員も増加し事業所も分かれ、社員間の情報共有、コミュニケーションツールとしてスタートしました。2002年からはNTSと係わりのある研究者の紹介、新製品・関連情報を中心に社外にも発信する広報誌に姿を変え、トータル10年目となりました。情報発信ツールはWEB、メルマガ、ブログ、フリーペーパーなど多様化するなか、気軽に読んでいただける冊子となるよう更に追求していきたく思います。(奈)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-0034 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX: 03-3814-9152 E-mail: eigyo@nts-book.co.jp

NTSニュース

2007年6月号(通巻100号)
2007年6月7日発行